

仲座 栄三



なかぎ・えいぞう 1958年生まれ。宮古島市出身。琉球大学工学部教授。専門は防災工学、海岸工学。2002年から03年にハワイ東西研究センター客員研究員。琉球大学の副学長や付属図書館長なども歴任。

の尽力は著書『八重山の明和大津波(初版・1968年、改定版・1981年)』に見られる。

牧野氏は、そのことについて「運命と言えるが、奇跡ではなく、渾身のそして執念の作である」と語っている。それは防災工学や海

岸工学など専門的な立場からみても無二の体系的資料と評価されよう。古文書と並べて教科書などに記すとともに、重要文化財としての指定保存が早急に求められる。

「島を横断」説も

沖縄地方に来る大津波と

はどのようなものか？

これに答えるには、沖縄地方にこれまで現れた巨大津波の実態を知る必要がある。

宮古島の北西ほどにある

波以前にも多数回の大津波

の発生があったとする判断

に変わった。こうした巨大

津波多数回発生説に対し

て、牧野氏は、「根拠のない、又価値もない典型的机上の空論」と強く反論した。

付着サンゴ化石の年代分析結果は、2000年前ほどに明和津波を上回る規模の巨大津波が発生したこと

を推測させ、さらに2500年あるいは500年に1度ほどの繰り返しで大津波の

石垣島の大浜村の一角に、高さ7m、胴回り40mほどの大きな岩塊がある。これに名前がないことに驚き、牧野氏はこれに「津波大石(つなみういし)」と命名し、それが明和大津波によるものと判断した。

また、同時にこのことは、津波石のすべてを明和津波によるものと判断していた牧野氏の見解と激しくぶつかった。しかし、専門家らは、後に、それらが津波によるものと認め、さらに明和津

波以前にも多数回の大津波の発生があったとする判断に変わった。こうした巨大津波多数回発生説に対し

て、牧野氏は、「根拠のない、又価値もない典型的机上の空論」と強く反論した。

付着サンゴ化石の年代分析結果は、2000年前ほどに明和津波を上回る規模の巨大津波が発生したこと

を推測させ、さらに2500年あるいは500年に1度ほどの繰り返しで大津波の

発生を推測させるものであった。また、「大浜の津波大石のことは、明和津波を伝える古文書には何ら記されていない」という歴史家らの判断は、明和津波以前にこの巨石を移動させた巨大津波の発生をいやがおうにも想像させた。その結果、牧野氏の命名による大浜の津波大石は、皮肉にも明和津波以前の巨大津波の存在を語るシンボリックな存在と化した。

しかしながら、最近の研究によつて、沖縄先島地方に散在する巨大津波石が明和津波起源であることが分かるようになり、さらに発掘調査結果からは、当時ではダイヤモンドにも匹敵する貴重なカムイヤキを添えられた謎の少女の骨の存在が、解明の鍵を与えた。

さらに、これまで古文書に記録されていないと解されてきたあの大浜の津波大石に関する歴史家らの見解

を覆す発見もあった。明和津波関連古文書は、しっかりと記していた。

古文書の欠損的な部分を歴史家らは「何という字が書いてあるか」の観点で分析していた。対して筆者は、「何という字が書いてなければならぬか」の観点から分析した。「悪石」とま

で呼ばれた大浜の津波大石は「聖なる石」へと転じた。数々の科学的証拠は、牧野氏の見解に正しさがあることを後押ししている。沖縄先島地方に残された巨大津波の痕跡は「明和大津波の唯一説」を語っている。

古文書はさらに、「津波の遡上高さを、最大85m(二十八丈二尺)」と記している。牧野氏は、この数値を肯定的に扱い、伝承にも照らして、「津波は島を横断した」とも推測している。これらの検証は現代の科学をもつてしてもまだ困難なことであるが、先人の残した「津波遡上の教訓教値」として、そして「島横断津波の教訓」として、それらは語り継がれるべきものと考えている。

陸側への移転も

こうした巨大津波の来襲にどう対応していくべきかなども選択肢と言えよう。

？ 東北の地元紙は最近、「沿岸に張り巡らされた新設の巨大堤防が村の風景を変え、故郷は失われた」と伝えている。研究室では、防潮林の効果、構造物による効果などさまざまな防災対策が繰り返し検討されている。

しかし、いかような策をもつても巨大津波への対応は容易なことではない。今後の防災対策を考える上で重要なことは、これからの少子高齢化社会への対応でありかつ、歩くのが術の時代に比べ、日常的に我々は便利な現代技術に囲まれていることの考慮である。数千年に1度の巨大津波に対応する策、沿岸から徐々に撤退し、到来する社会構造に対応できるような未来社会の創造も選択肢の一つといえる。

すなわち、巨大津波が千年に一度の頻度なら、そうした長期的未来を見据えて、できるだけ陸側に日常生活空間を創造しそこから沿岸を観光資源として保全し活用する策や少子高齢化で過疎化の進む沿岸の村や町などを集約した形(コンパクトシティなどとして)に陸側へ移転することなども選択肢と言えよう。

宮古島の北西ほどにある

波以前にも多数回の大津波

の発生があったとする判断

に変わった。こうした巨大

津波多数回発生説に対し

て、牧野氏は、「根拠のない、又価値もない典型的机上の空論」と強く反論した。

付着サンゴ化石の年代分析結果は、2000年前ほどに明和津波を上回る規模の巨大津波が発生したこと

を推測させ、さらに2500年あるいは500年に1度ほどの繰り返しで大津波の

発生を推測させるものであった。また、「大浜の津波大石のことは、明和津波を伝える古文書には何ら記されていない」という歴史家らの判断は、明和津波以前にこの巨石を移動させた巨大津波の発生をいやがおうにも想像させた。その結果、牧野氏の命名による大浜の津波大石は、皮肉にも明和津波以前の巨大津波の存在を語るシンボリックな存在と化した。

しかしながら、最近の研究によつて、沖縄先島地方に散在する巨大津波石が明和津波起源であることが分かるようになり、さらに発掘調査結果からは、当時ではダイヤモンドにも匹敵する貴重なカムイヤキを添えられた謎の少女の骨の存在が、解明の鍵を与えた。

さらに、これまで古文書に記録されていないと解されてきたあの大浜の津波大石に関する歴史家らの見解

を覆す発見もあった。明和津波関連古文書は、しっかりと記していた。

# 沖縄も巨大津波痕跡 千年見据え、防災模索を

古文書と津波石

今年、明和大津波の発



宮古島東平安名崎に打ち上げられた津波石=2020年(著者撮影)

宮古島の北西ほどにある

波以前にも多数回の大津波

の発生があったとする判断

に変わった。こうした巨大

津波多数回発生説に対し

て、牧野氏は、「根拠のない、又価値もない典型的机上の空論」と強く反論した。

付着サンゴ化石の年代分析結果は、2000年前ほどに明和津波を上回る規模の巨大津波が発生したこと

を推測させ、さらに2500年あるいは500年に1度ほどの繰り返しで大津波の

宮古島の北西ほどにある

波以前にも多数回の大津波

の発生があったとする判断

に変わった。こうした巨大

津波多数回発生説に対し

て、牧野氏は、「根拠のない、又価値もない典型的机上の空論」と強く反論した。

付着サンゴ化石の年代分析結果は、2000年前ほどに明和津波を上回る規模の巨大津波が発生したこと

を推測させ、さらに2500年あるいは500年に1度ほどの繰り返しで大津波の

宮古島の北西ほどにある

波以前にも多数回の大津波

の発生があったとする判断

に変わった。こうした巨大

津波多数回発生説に対し

て、牧野氏は、「根拠のない、又価値もない典型的机上の空論」と強く反論した。

付着サンゴ化石の年代分析結果は、2000年前ほどに明和津波を上回る規模の巨大津波が発生したこと

を推測させ、さらに2500年あるいは500年に1度ほどの繰り返しで大津波の

宮古島の北西ほどにある

波以前にも多数回の大津波

の発生があったとする判断

に変わった。こうした巨大

津波多数回発生説に対し

て、牧野氏は、「根拠のない、又価値もない典型的机上の空論」と強く反論した。

付着サンゴ化石の年代分析結果は、2000年前ほどに明和津波を上回る規模の巨大津波が発生したこと

を推測させ、さらに2500年あるいは500年に1度ほどの繰り返しで大津波の